



# ふるさと吉富町

私たちが暮らす「吉富町」には、現在に至るまでの数々の歴史があります。

そして、そこには現在の快適な生活のベースがあります。

そんなふるさと吉富町について、いろいろな視点からご紹介していきます。

## 第14回 佐井川橋

### 大正生まれの現役橋

町の西側を流れ周防灘に注ぐ佐井川。豊前市下川底<sup>とどろ</sup>に源流をもつ約15kmの河川で、吉富小学校の校歌にも歌われています。町内には、その佐井川を越える橋として、「土屋橋」とJRの鉄橋、そして県道・町道にかかる2つの「佐井川橋」があります。

2つの佐井川橋のうち下流側のものは、鉄筋コンクリート製で長さ81m、大正9年に建設され今も現役で利用されています。もともと9基の橋脚を有していましたが、昭和19年の洪水により東側の1基が流されてしまいました。しかし、本格的な井桁状の8基の橋脚や円形模様の特徴的な欄干などは、建設当時の姿がりのままだに残されています。

### お殿様が通った街道

この佐井川橋を挟んで東西に延びる道の歴史は古く、江戸時代初期、中津城主からのちの小倉城主となる細川忠興が、小倉城下と中津城下を最短路で結ぶ「中津街道（下往還）」としてひらいたものです。

ただ、その頃はまだ佐井川には橋は架かっていなかったようで、「佐井川を歩いて渡った」という内容の記述が当時の旅人の日記（「筑紫紀行」）にも残されています。歴代の中津城主もこの街道を行き来していたと思われますが、大名行列が橋のない川をどのように越えていたのか、その光景に想像がふくらみます。



### 土木遺産に認定

その後大正期に入り、まだ鉄筋コンクリート製の橋が珍しかった時代の先駆けとして、堅ろうな橋が完成しました。現在まで約一世紀にわたり大規模な改修もなく現役橋として利用されているところに、当時の技術力の高さが伺えます。平成28年11月にはその歴史的価値が認められ、公益社団法人土木学会が推奨する「土木遺産」として認定されました。東吉富村の時代から交通の要所を担ってきた佐井川橋は、大正ロマンの面影を今に伝え、今日も人々の往来を見守っています。



橋の銘板と  
土木遺産認定プレート



土木遺産認定書